

パトリア・カリーニの進歩主義の教育思想

教職開発コース 橘 高 佳 恵

The Progressive Educational Thought of Patricia Carini

Yoshie KITAKA

This paper describes the educational thought of Patricia Carini, a progressive U. S. educator and thinker. Since the 1960s, Carini has been one of the central figures supporting the open education movement and progressive education. The paper first describes the development of the Prospect School, which Carini with her three co-founders, Louis Carini, Marion Stroud, and Joan Blake, founded in 1965 in North Bennington, Vermont. It then describes Carini's basic stance, which centers on attending to the particular. Finally, the paper focuses on work, story, and play, describing how they enable us to attend to the particular.

目 次

- 1 主題と方法
 - 1.A 研究の主題
 - 1.B 先行研究の検討
 - 1.C 課題と方法および構成の概要
- 2 プロスペクト・スクールの展開
- 3 パトリア・カリーニの基本的姿勢—特殊の擁護—
- 4 パトリア・カリーニのディスコース
 - 4.A 作品
 - 4.B 物語
 - 4.C 遊び
- 5 結論と残された課題
 - 5.A 本論の主題
 - 5.B 本論の結論
 - 5.C 考察
 - 5.D 残された課題

ケーション運動(open education movement)の一つの拠点が生まれ、この拠点は2000年代まで存続した。

カリーニこそ、ヴァーモント州に学校プロスペクト・スクール(Prospect School)を設立して、オープン・エデュケーション運動の一つの拠点を生み出した人物である。彼女はオープン・エデュケーション運動の衰退後も独自の活動と思想を発展させてゆき、多くの教育関係者に影響を与え、1960年代以降の進歩主義教育(progressive education)の中心的な担い手の一人となった。

カリーニは、大学の学者であるよりも学校を拠点とする実践者であった。学術論文ではなく教育関係者へ向けての言葉を多く残しており、彼女の思想の全体像はアメリカにおいてもまだ明らかにされていない。カリーニの思想の構造的な把握をととして、彼女の活動と思想の説得性に迫りたい。

1 主題と方法

1.A 研究の主題

本研究は、アメリカの進歩主義教育者パトリア・カリーニ(Patricia Carini, 1932-)の思想を明らかにするものである。カリーニは、1960年代以降ヴァーモント州を拠点として教育に携わっている。

ヴァーモント州は進歩主義の伝統で知られる。デューイの生誕地であることに象徴され、進歩主義を最初に掲げた高等教育機関の一つであるベニングトン・カレッジは1930年代に同州に誕生した。全米で学校改革運動が展開した1960年代にも、オープン・エデュ

1.B 先行研究の検討

アメリカのオープン・エデュケーション運動は、1960年代半ばから1970年代初頭にかけて広く支持された学校改革運動である。アメリカでは、1960年代初頭から1970年代初頭にかけて学校改革運動が興隆した。伝統的な学校教育の改革を目指すこの多様な運動には、大きく二つの系譜を見出すことができる。フリー・スクール運動(free school movement)とオープン・エデュケーション運動である。フリー・スクール運動は、イギリスのアレクサンダー・ニール(Alexander Neill)によって設立されたサマーヒル・スクール(Summerhill School)を端緒とし、ジョナサン・

コゾル(Jonathan Kozol)やジョン・ホルト(John Holt)を大きな影響力として展開した系譜である。新しい教育ヴィジョンを抱く保護者や教師が小規模で無償の私立学校を設立して、自身のヴィジョンを公立学校の外で実現しようとするかたちで展開した。他方オープン・エデュケーション運動は、イギリスのインフォーマル・エデュケーション(informal education)に学んだ系譜である。ジョゼフ・フェザーストーン(Joseph Featherstone)の1967年の『ザ・リパブリック』誌上の連載(Featherstone, 1971)や、チャールズ・シルバーマン(Charles Silberman)の1970年の『教室の危機』(Silberman, 1970)によって広く知られた。すべての子どもにとってアクセス可能な既存の公立学校や私立学校が拠点であり、学校を新しいヴィジョンへ向けて漸進的に変容させてゆく道筋の系譜であった(Graubard, 1972; 稲垣, 1977; Miller, 2002; 小野, 1977; Ravitch, 1983)。

さらに、オープン・エデュケーション運動は進歩主義教育の再興であった。アメリカでは、すでに20世紀初頭、学校改革運動が興隆していた。新教育運動(new education movement)の世界的な展開の一環として、そして国内における「革新の時代」(progressive era)の中でのことである(Cremin, 1961; Link, 1954)。オープン・エデュケーション運動は、20世紀初頭の学校改革運動のうち、進歩主義教育の系譜とりわけ「子ども中心主義」(child-centeredness)を受け継ぐ系譜であった(Church & Sedlak, 1976¹⁾; 佐藤, 1990, p. 7, p. 153)。

カーリーニは、オープン・エデュケーション運動の系譜に位置づけられている。リディア・スミス(Lydia Smith)の『「オープン・エデュケーション」再考』(Smith, 1988)は、カーリーニの活動をオープン・エデュケーション運動最初期の主要な事例に数えている。さらに約10年後の同名の論文『「オープン・エデュケーション」再考』(Smith, 1997)は、プロスペクト・スクールにおいて編み出された「評価方法」を、オープン・エデュケーション運動の中で生まれた標準学カテストに代わる主要な評価方法に挙げている。

スミスが評価方法として言及したのは、プロスペクト・スクールで編み出された一連の「記述的レビュー」(descriptive review)であり、進歩主義の教師や教師教育者によってたびたび紹介されてきた。ブレンダ・エンゲル(Brenda Engel)によれば、記述的レビューは「子どもの学校生活を観察し記録する方法」であり「子どもを『可視化する』」ものである(Engel, 2005, p. 18)。ダーク・ローズヴェルト(Dirk Roosevelt)とリン・スト

リーブ(Lynn Strieb)によれば、「記述的レビュー」は「生徒一人ひとり」の「欠陥」ではなく「強さ」をもとにして学びを支援する方法として公立学校や教師教育に取り入れられている(Roosevelt, 2007, p. 118; Strieb, 2010)。日本でも、カーリーニの共編著の翻訳『描写レビューで教師の力量を形成する』(原題*From Another Angle*) (小田・小田・白鳥, 2002)によって紹介されている。小田勝己によれば、カーリーニの「描写レビュー」(小田による「記述的レビュー」の翻訳)は「現象学」に依拠しており、「変容」してゆく「子どもの思考や学び方、関心事」を「長期的」に「把握しようとする」ものであり、「日本の普通の公立小学校や中学校」においては「ポートフォリオ」や「ルーブリック」と組み合わせて「カリキュラムの修正と教員の力量形成」に資するものとなる(小田, pp. iv-v, p. viii)。

オープン・エデュケーション運動に関して、カーリーニを含めて実践レベルで中心となった人びとの検討はまだ多くない。しかしまさにこれらの人びとが、1970年代以降アメリカが保守化してゆく中、今に至るまで進歩主義の教師を支えてきた。アメリカにおける伝統的な学校教育に代わる教育ヴィジョンの展開を辿るには、これらの人びとのさらなる検討が欠かせない。カーリーニに関しては、記述的レビューが彼女に接近する手掛かりとなってきた。しかし記述的レビューは、彼女の思想を行為に移す一つの方途である。彼女の思想の理解なくしては既定の手順と化し、彼女の思想に反してしまう。フェザーストーンは、カーリーニを、「私たちの多くにとって知性的なガイドでありインスピレーション」であると言う(Featherstone, 2001, p. xi)。カーリーニの思想をとおして、彼女の説得性に迫りたい。

1.C 課題と方法および構成の概要

カーリーニの思想を構造的に把握するために、彼女の基本的姿勢と、基本的姿勢を支える特徴的なディスコースを把握することを課題とした。カーリーニは、学術論文ではなく教師や保護者へ向けてのスピーチ、インフォーマルな場での研究報告、支援母体への報告書などを多く残している。これらの資料をもとに彼女の活動と思想を辿った。おもな資料は、カーリーニの著書『力強く始まる』(*Starting Strong*) (Carini, 2001d)、共編著『もう一つの視点から』(*From Another Angle*) (Himley (with Carini) (Eds.), 2000)および『ジェニーの物語』(*Jenny's Story*) (Carini & Himley (Eds.), 2010)、そしてヴァーモント大学所蔵の「プロスペクト・スクー

ルおよび研究教育センター・アーカイヴズ」(Prospect School and Center for Research and Education Archives)である。

以下、第2章でカーリーニの経歴を交えてプロスペクト・スクールの展開を辿る。第3章では、カーリーニの基本的姿勢である特殊(particular)の擁護について検討する。第4章では、作品(work)、物語(story)、遊び(play)をめぐるディスコースを検討する。

2 プロスペクト・スクールの展開

カーリーニの思想の発展は、プロスペクト・スクールとともにあった。本章では、カーリーニの経歴を交えてプロスペクト・スクールの展開を辿る。

プロスペクト・スクールは、1965年、ヴァーモント州ノースベントンに設立された。カーリーニ、夫ルイ(Louis)、教師マリオン・ストラウド(Marion Stroud)、心理学者ジョン・ブレイク(Joan Blake)によって、フォード財団の支援を得て設立された。初年度はキンダーガーデンのみ、カーリーニ夫妻の息子ピーターも入学する(Prospect School, March, 1986)。一年ごとに学年を増やしてゆき、最終的には4歳半から11歳までの小学校段階と11歳から14歳までの中学校段階を有するようになった(Carini, 2000a)。プロスペクト・スクールは、インフォーマル・エデュケーションおよびデュエイとフレール理論にもとづいていた。1932年に生まれたカーリーニは、1953年にベントン・カレッジより学士号を取得する。「最初の『進歩主義』カレッジ」であるベントン・カレッジで、彼女はデュエイに触れていた(“Editorial”, 1931, p. 65)。カーリーニは教師ではなく「観察者」(observer)としてプロスペクト・スクールにおり、日々子どもを観察し研究していた。

プロスペクト・スクールは、設立後間もなくヴァーモント州教育省の興味を引く。州教育省は、1967年に「州アクション・センター」を設立し、ディレクターとしてストラウドを招聘する。1968年、子ども中心主義の施政方針「ヴァーモント教育計画」(*The Vermont Design for Education*) (Vermont State Department of Education, 1968/1971)を発表する。そして1969年、プロスペクト・スクールを州のデモンストレーション・スクールとする。プロスペクト・スクールは1970年頃から教師教育プログラムやサマー・スクールを開講してゆき、多くの公立学校教師が訪れるようになった。

カーリーニは、プロスペクト・スクールがいずれ公立学校となることを望んでいた。地域の子どもの希望者は皆受け入れて、貧困家庭のために授業料免除の制度を設けていた²⁾。補助金が頼りであり、開校2年目には初等中等教育法(Elementary and Secondary Act of 1965)タイトルⅢの補助金を得る。プロスペクト・スクールは、タイトルⅢの補助金を4年間得た数少ないプログラムの一つである。1971年以降は比較的継続的にカーネギー財団、ジェシー・スミス・ノイエス財団、ロックフェラー財団などの支援を得た(“Descriptions of Prospect School”, ca. 1965-1983)。

同時代の進歩主義教育者をとりわけ引きつけたのは、プロスペクト・スクール最大の特徴をなす子どもの作品のコレクションである。カーリーニは、子どもごとに、その子どもがプロスペクト・スクールに通った全期間にわたって作品を保管していた。当時のアメリカでは、プロジェクト・ヘッド・スタート(Project Head Start)が1965年に開始して以降、プログラム評価の必要性から標準テストの使用が拡大していた。子どもの作品の膨大なコレクションは、美しいことに加え、標準テストに代わる子どもの学びを捉える手掛かりと映ったのだ。「ノースダコタ評価研究グループ」(North Dakota Study Group on Evaluation, NDSG)とは、カーリーニも出席した1972年の小ミーティングを発端とする進歩主義教育者の集う場である。NDSGの年次ミーティングにおいて、プロスペクト・スクールの研究報告やワークショップが継続的に行われた。

1979年、プロスペクト・スクールは改組されて「プロスペクト・アーカイヴおよび教育研究センター」(Prospect Archive and Center for Education and Research, PACER)となる。PACER全体の運営および研究や教師教育プログラムを担う中心機関と、子どもの作品のプロスペクト・アーカイヴ、そしてプロスペクト・スクールによって構成される(“Reorganization of Prospect”, 1978-1979)。PACERを拠点として、カーリーニの活動と思想はさらに発展してゆく。しかし1991年、プロスペクト・スクールは財政難のために閉校となる。とうとう公立学校になることはなかった(Carini, 2010a)。PACERも2010年ついに閉鎖となり、プロスペクト・アーカイヴはヴァーモント大学に寄贈された。

3 パトリシア・カーリーニの基本的姿勢—特殊の擁護—

特殊の擁護という姿勢が、カーリーニの活動と思想を

貫いている。人は一人ひとり「特殊な瞬間の特殊な場所」を占めており、否応なく特殊である。ところがアメリカでは、人はますます抽象化と一般化によって捉えられている。「一人ひとり特殊である子どもに注意を払う」ことが、「授業と学びの標準化、そして最も悲劇的なことには学習する彼女や彼自身の標準化」に抵抗して、異なる「教育のヴィジョン」を追求する方途である (Carini & Himley, 2010, pp. xi-xiii)³⁾。

「特殊の持つ力」(Carini, 2010c)によれば、特殊の持つ力とは「私たちがそのものの具体性に人間的に参加させる」力である。次のような出来事があった。ある早朝、カーニーは人のまばらな空港で幼い女の子に出会った。ラウンジの椅子の一行を、足を交差させながら歩いている。背もたれに沿って、しかし掴まることはせず、一心に敏捷に進んでゆく。フライトのアナウンスとともに、それまで談笑していた家族の一人が抱え上げて女の子は行ってしまった。この小さな出来事は、しかし「この子ども自身の資源、世界とかかわりたいという彼女自身の深い欲求、そして一列の椅子という、資源になるなんてまるで考えられないし予測できないような資源に機会を発見する彼女の能力」に私たちの注意を向けさせる。私たちは、「彼女の確かな足取りや焦点や身体への確信は、彼女の人生をどのようなものにするだろう」と思い巡らすし、「他の子どもや自身の子ども時代を思い浮かべないではいられない」。「一つの特殊が他を招く」のだ。「特殊に注意を払う」ことによって、「子ども時代に対する一般化された知覚」、「子どもを学ぶよう『動機づける』必要があるという想定」や「学校における子どもの身体と表現の規制」の問い直しが始まる (Carini, 2010c, pp.60-61)。

特殊に注意を払うすなわち「一般化」に抵抗するのは、「倫理的立場」であり「政治的行為」である。なぜなら、特殊に注意を払うとは「慣習的な知覚と一般化された知識」のもとで「見えない」ようになっていく「子どもや教師や制作者」を「解放する行為」であり、「現状」(status quo)を変容させる「ラディカルなアイデア」であるからだ。「この民主的なアイデアと理念を実行可能で積極的な行為に翻訳したもの」が、記述的レビューであった (Carini, 2010c, pp. 62-63)。

記述的レビューとは、教師が協同的に専門性を高めてゆく方法である。レビューの対象によって「子どもの記述的レビュー」(descriptive review of the child)や「作品の記述的レビュー」(descriptive review of the children's works)などがあり、成立時期は少しずつ異

なるものの、基本のプロセスは共通している。教師や学校関係者が集う。報告者が一人の子どもや作品について丁寧に述べるとともに、のちの意見交流においてテーマとしたいことがらを伝える。司会者が報告をまとめたのち、集った人びとは、テーマに沿って考えを交流する。裁定的な見方はしない。お互いの省察をとおしてその子どもや作品の特殊がより見えるようになり、イメージが変容することが重要である。一人の子どもや作品をより良く見る経験は、他の子どもや作品をより良く見ることにつながる。

特殊の擁護という姿勢は、1980年代後半には明確になっている (Carini, 1987)。2000年代に入ると、アフガニスタン戦争とイラク戦争や「すべての子どもを置き去りにしない法」(No Child Left Behind Act of 2001, NCLB法)のもと、特殊の擁護はさらに切実な響きを帯びてくる。戦争も、NCLB法による学校教育と子どもの標準化も、「遠くから」の「抽象化と一般化」によって遂行されている。一人ひとりの特殊であることをより良く見ることが「人間の領域」(human territory)を回復する道筋であり、「保護者、教師、養護者、教師教育者、研究者」が日々行っていることである (Carini, 2001c, p. 7, p. 13; Carini, October 12, 2002, p. 6)。

4 パトリシア・カーニーのディスコース

一人ひとりの特殊に注意を払う手掛かりが、作品、物語、遊びである。いずれも人の特殊の現れであり、まさに特殊であることによって人を誘いつないでいる。

最も初期から検討されているのは作品である。次いで1980年までに、物語の重要視が明確になる。そして遊びは、とくに1990年代半ば以降、繰り返しカーニーのスピーチの主題になっている。

4.A 作品

作品すなわち“work”は、何よりも子どもの作品を指している。作品の意味の理解の深まりとともに、のちには子どもの遊びや大人の仕事とも意味の重なる言葉となった。

子どもの作品は、開校当初から保管されていた。カーニーが、「子どもがよく制作すること、作品の美しさと力に圧倒された」からである。「指示やおだてや励ましや、教師の指示する『課題』」などはなかった。「扱いやすい自然のモノ」が豊富にあり、「これらのモノに完全に夢中になってこれらの可能性を探究す

る時間」のある環境で、子どもは「自身や周りの人に、そしてとりわけモノに対して」話し歌いながら、「有り余るほどの作品」を生み出していた。子どもの作品と制作に魅了されて始まった、子どもがくれたり置いて帰ったりした作品を保管するかたちの収集であり、コレクションはまずは蓄積していった。作品の意味が明らかになるには時間が必要であった(Carini, 1986a, p.2)。

作品は人の特殊の現れであり、しかも人の特殊をつくってゆく。作品は「子どもの持続的な興味や選択や好み」の表現であり、しかも「私の生は作品と制作をとおして範囲と定義を獲得する」からだ(Carini, 2001a, p. 2; Carini, 2001b, p. 15)。1970年代をとおして作品の意味が理解されてくる中で、記述的レビューも成立に向かった。あるとき、「予測できない怒りの発作」によって教室を荒らしてしまう男の子がいた。ところがショーンの記述的レビューから見えてきたのは、多くの作品を生み出す子ども、しかも種々の材料や方法を実験的に器用に試し、多くの装飾を施し、長時間集中して制作する子どもであった。彼の発作は、怒りよりも「張りつめた気持ちの放出」のように見えてきたのだ。ショーンへの対応は、この新たな見方を含んで考えられてゆく(Carini, 2010b, p. 161)。

長期にわたるコレクションからは、子ども同士のつながりも浮かびあがった⁴⁾。1980年代前半、通学者は累計約350人となっていた。コレクションは250,000点に上り、線画、絵画、デザイン、壁画、日記、詩、エッセー、物語などの文章、裁縫など織地の作品、印刷、写真、フィルム、コラージュ、そして少数ながら三次元の作品が含まれていた。子どもごとにコレクションを辿るならば、「住居などのモチーフ」や「起源、安全、危険、アイデンティティ、場所といったテーマ」がどのコレクションにも潜んでいる。そしてすべてのコレクションが、「すべての子どもが重要な力と能力」すなわち「表現の力と問う能力や、物語る力と秩序と意味を打ち立てる能力など」を「ふんだんに有している」ことを証明していた(Carini, December, 1986, pp. 11-14)。

作品は、「そのものの十分であること」(sufficiency of what is)を伝えている。十分であるとは、「最高」や「完成」のことではなく「美しい」という意味である。「学校と社会の根深い習慣」は、「それが何でないか」(what isn't)を探し「欠陥を探す」のだが、特殊に注意を払うならば「今ここにいる」子どもや作品が美しい(Carini, October 12, 2002, pp. 10-11, p. 17)。

4.B 物語

物語の聞き手は、語り手の「生」が「豊かで複雑である」ことを知る。相手にも生があり、自分の生と同じく「欲求や憧れやケアに満ちており、動揺や喪失によって心乱され、私たち自身の性質の行き過ぎのせいで傷ついている」(Carini, 1997, p. 70)。

人の物語は、人の特殊を伝えるとともに人を結ぶ。この二つの機能は1980年には見出されている。子どもの「生と記憶」には、「両親や教師や祖父母」の物語によって、「彼や彼女の生を単なる生物学的出来事以上のものにする特殊な遺産が織り込まれる」。子どもはつながりの中で生の文脈を得るのだ(Carini, Spring, 1980, p. 5)。人は、お互いの物語や「より大きな公共の物語」に共有の経験を見出す。公共の物語とは、文学や神話の伝える「人間性」の物語である(Carini, 2001a, p. 2)。

場所や時間をも超えて人をつなぐ物語の公共性は、ある都市部の公立学校教師の経験をとおして記述されている。ある年一年生が落ち着かず、過度に活動的でテンポの速い日々が続いていた。しかしお話の時間だけはやや落ち着いたという。そして『大きな森の小さな家』を読み聞かせた日、子どもたちは引き込まれて「その場で動かないようになった」。子どもたちはワイルダーの作品を求め、彼女をととても親密に感じるようになった。子どもたちは、「祖母のような安心させてくれて力を与えてくれるようなイメージ」をワイルダーの物語から受け取ったのだった(Carini, 1986b, p. 14)。

人びとには共有の経験がある。そしてまた、一人ひとりの特殊によって彩られているそれぞれの経験が、お互いや公共の物語に「鮮明さと生気をもたらしている」。人の生に文脈を与えるとともに、新たな意味をもたらしていっそうイメージ豊かに変容させてゆく点で、物語はすぐれて教育的である(Carini, October 12, 2002, p. 4)。

4.C 遊び

遊びはとくに1990年代半ば以降、遊びの余地のさらなる縮小の中で、繰り返しスピーチの主題になっている。

遊びの意味は、作品や制作の意味に重なっている。作品についての理解の深まりが、遊びについての理解をもたらしていた。作品も遊びも人を「すっかり夢中にさせるものであり、極めて主観的であり、驚きに刺激され欲求に活気づけられている」。「大人にとっての

大切な仕事(loved work)や「天職」が、「子ども時代にとっての遊び」である(Carini, 2000b, pp. 1-2)。

遊びは決して「分類」され得ない。一回ごとに特殊な場所と時間を占める子どもや子どもたちの表現であるからだ。「遊びの美しさと神秘と力」は、一回ごとの特殊な詳細に存している。そして慣習を超えて「新たな可能性」を現出させる。「生活のすべての側面を経済的価値に組み込み、標準化と一様であることを高く評価し、新しさと多様性を低く評価する」今のアメリカにおいて、遊びが軽視されているのは驚くことではない(Carini, 2000b, pp. 2-3, p. 10)。

遊びをめぐるディスコースは、破壊の意味を明らかにする。遊びは「世界を経験し学びたいという人間的な衝動」であり、やめさせることはほとんど不可能である。それでも遊びが軽視され、人の「創造したいという強力な欲求」が行き場を失ったときに破壊が起こるのだ。「創造へと駆り立てる力と、破壊へと駆り立てる力の境界」は浅い。表現の「放出口と手段を失った強力な欲求」は、「激しさにおいて創造に等しいか上回るような破壊(unmaking)として表出する」ことになる(Carini, 2000b, pp. 12-13)。

遊びに見られる専念が、世界にかかわり学ぶ原動力である。教育者の役割とは、「この子どもが有しており、十分に応答されたならば花開き栄えるものは何だろう」と問い、子どもの「世界の理解の方法」すなわち一人ひとりの表現の解放を可能にすることである(Carini, April 11, 2002, p. 14)。

5 結論と残された課題

5.A 本論の主題

本研究は、アメリカの進歩主義教育者パトリシア・カーリーニの思想を明らかにするものであった。カーリーニは、オープン・エデュケーション運動そして1960年代以降の進歩主義教育の中心的な担い手の一人である。しかし彼女の思想の全体像は、アメリカにおいてもまだ明らかにされていない。カーリーニの基本的姿勢と特徴的なディスコースを把握し、彼女の思想を構造的に把握することをとおして、彼女の活動と思想の説得性に迫った。

5.B 本論の結論

第2章において、カーリーニの経歴を交えてプロスペクト・スクールの展開を辿った。1965年に設立されたプロスペクト・スクールは、ヴァーモント州の進歩主

義の伝統の中にあった。インフォーマル・エデュケーションおよびデューイとフレーベルの理論にもとづくプロスペクト・スクールは、ヴァーモント州教育省の興味を引く。さらに子どもの作品の膨大なコレクションが、NDSGをはじめとして進歩主義教育者を引きつける。1979年にはPACERへと改組され、さらなる発展を遂げる。すべての子どもに開かれていたプロスペクト・スクールは、つねに財政難であった。1991年にプロスペクト・スクールは閉校し、2010年ついにPACERも閉鎖となった。

第3章において、カーリーニの基本的姿勢である特殊の擁護について検討した。人は一人ひとり否応なく特殊である。特殊に注意を払うことによって、人は相手の生に人間として参加する。アメリカでは、人はまずまず抽象化と一般化によって捉えられているのだが、このとき人は見えなくなっている。特殊に注意を払うとは、抽象化と一般化のもとで見えなくなっている人びとを解放する行為であり、現状を変容させるラディカルなアイデアであり、したがって倫理的および政治的立場であった。

第4章において、作品、物語、遊びをめぐるディスコースを検討した。これらは一人ひとりの特殊に注意を払う手掛かりである。いずれも人の特殊の現れであり、まさに特殊であることによって、人を誘いつないでいた。作品は、制作者の興味や選択や好みの現れである。生み出された作品は、制作者の生にさらなる具体性を付与する。作品によって、制作者の生そのものが制作されてゆく。子どもの作品のコレクションは、制作がすべての人の有する人間的な能力であることを示していた。物語は、一人ひとりの特殊な生を伝えるものである。物語をとおして、人は相手の生もまた豊かで複雑であることを知る。物語はすぐれて教育的である。人の生に文脈を与えるとともに、いっそうイメージ豊かに変容させてゆくからだ。人びとは共有の経験において結びつく。そしてまた、一人ひとりの特殊によって彩られているそれぞれの経験が、お互いの経験や公共の物語に新たな意味をもたらして、人の世界の見方を変容させる。遊びにおいて子どもは夢になっている。遊びは一回ごとに特殊な出来事であり、慣習を超えて新しい可能性を現出し、決して分類され得ない。アメリカにおいて遊びの余地は狭くなっている。しかし遊びに見られる専心こそが、世界にかかわり学んでゆく原動力である。行き場を失った表現への欲求は、破壊において表出される。

5.C 考察

カーリーニの思想をとおして浮かびあがるのは、人の特殊と普遍性である。

開校から数年のあいだ、記述的レヴューのまだ成立していない時期、カーリーニは観察や記述とともに子どもの実験を行っていた。彼女は1950年代に心理学の訓練を受けている(Carini, Blake, & Carini, June 30, 1966)。カーリーニを、子どもの成長を把握する方法としては実験から離れさせたのは、目の前の一人ひとりの子どもであった。特殊に存する一人ひとりの美しさと、特殊な生を制作してゆくという人の普遍性は、世界の見方を変容させる。

カーリーニは徹底的に子どもから始める。子どもが表現への欲求を解放できることが最重要であるため、「制作させる」という姿勢は退けられる(Carini, May 22, 1993, p. 15)。彼女のラディカルさであり、学びのスタンダードは一人ひとりのうちから生成し、人びととの交流と共有によって洗練されてゆく。

カーリーニが作品や物語や遊びに見出した公共性は、多様な人びとの集う公共圏を成立させて維持する可能性を秘めている。しかしアメリカにおいて、子どもが制作し物語り遊ぶ余地はいよいよ狭くなっている。

5.D 残された課題

残された課題は、プロスペクト・スクールのカリキュラムの検討である。本稿で述べた基本的姿勢やディスコースにもとづくカリキュラムの展開を、実践に即して見たい。そしてまた、他の中心的な実践者との交流に注目して進歩主義教育のネットワークを明らかにすることも今後の課題である。

注

- 1) チャーチ&セドラック(1976)は、革新の時代の種々の改革を、多数派の「保守的進歩主義」(conservative progressivism)と少数派でラディカルな「リベラル進歩主義」(liberal progressivism)に分ける。この区分に従えば、20世紀初頭の子どもの中心主義とそれを受け継ぐ1960年代以降の進歩主義教育はリベラル進歩主義である。
- 2) 例えば1974年、年間授業料は小学校650ドル、中学校700ドルであり、3分の1の子どもが全額免除、さらに3分の1の子どもが一部免除であった。
- 3) 以下、引用中の下線は原文における強調である。
- 4) 子ども同士のつながりは、とりわけ「プロスペクト・アーカイブの参照版」(Reference Edition of the Prospect Archive)の作成プロジェクトをとおして見出された。男女18人ずつ計36人の子どものコレクションを抽出して整理した資料であり、3年をかけた

て1985年に完成した。

引用文献

- (カートンおよびフォルダで示してあるものは、「プロスペクト・スクールおよび研究教育センター・アーカイブズ」の資料である。)
- Carini, P. F., Blake, J. B., & Carini, L. P. 1966, June 30. *Evaluation of the Prospect School Project for: The Ford Co-operative Project for Curriculum Development*. Prospect School and Center for Research and Education Archives (Carton 8, Folder 14).
- Carini, P. F. 1980, Spring. "Storytelling and Education". *The Prospect Papers*, 5-10.
- Carini, P. F. 1986a. *About Looking*. [Speech given at Harvard University]. Prospect School and Center for Research and Education Archives (Carton 40, Folder 17).
- Carini, P. F. 1986b. "Building from Children's Strength". *Journal of Education*, 168(3): 13-24.
- Carini, P. F. 1986, December. *The Reference Edition of the Prospect Archive: Its Development and Its Implications for Looking at Children and Their Families*. [Based on speech given at the Harvard Graduate School of Education]. Prospect School and Center for Research and Education Archives (Carton 44, Folder 63).
- Carini, P. F. *On Value in Education*. New York, NY: City College Workshop Center, 1987.
- Carini, P. F. 1993, May 22. *Images and Immeasurables (II)*. [Speech given to the Philadelphia Teachers' Learning Cooperative]. Prospect School and Center for Research and Education Archives (Carton 40, Folder 24).
- Carini, P. F. 1997. "In the Thick of the Tangle What Clear Line Persists". In P. F. Carini, *Starting Strong: A Different Look at Children, Schools, and Standards* (pp. 53-71). New York, NY: Teachers College Press, 2001.
- Carini, P. F. 2000a. "A Page from the Prospect Album". In M. Himley (with P. F. Carini) (Eds.), *From Another Angle: Children's Strengths and School Standards: The Prospect Center's Descriptive Review of the Child* (pp. 1-7). New York, NY: Teachers College Press, 2000.
- Carini, P. F. 2000b. *How to Have Hope: Play's Memorable Transiency*. Prospect School and Center for Research and Education Archives (Carton 40, Folder 26).
- Carini, P. F. 2001a. "Introduction". In P. F. Carini, *Starting Strong: A Different Look at Children, Schools, and Standards*. (pp. 1-13). New York, NY: Teachers College Press, 2001.
- Carini, P. F. 2001b. "On a Human Scale". In P. F. Carini, *Starting Strong: A Different Look at Children, Schools, and Standards* (pp. 15-17). New York, NY: Teachers College Press, 2001.
- Carini, P. F. 2001c. *Opening Remarks*. [Speech given at the Prospect Center's annual fall conference]. Prospect School and Center for Research and Education Archives (Carton 40, Folder 27).
- Carini, P. F. *Starting Strong: A Different Look at Children, Schools, and Standards*. New York, NY: Teachers College Press, 2001d.
- Carini, P. F. 2002, April 11. *Noticing Play and Loved Work: Daily Lessons in Human Capacity*. [Speech given at Westchester Community

- College]. Prospect School and Center for Research and Education Archives (Carton 40, Folder 28).
- Carini, P. F. 2002, October 12. *Keeping the Child Present: Stories of Daily Acts of Kindness and Caring*. [Speech given at the Progressive Educators Conference]. Prospect School and Center for Research and Education Archives (Carton 40, Folder 29).
- Carini, P. F. 2010a. "History, Vision, Struggle: The Vermont Design for Education". In P. F. Carini & M. Himley (Eds.), *Jenny's Story: Taking the Long View of the Child: Prospect's Philosophy in Action* (pp. 97-107). New York, NY: Teachers College Press, 2010.
- Carini, P. F. 2010b. "Making and Doing Philosophy in a School". In P. F. Carini & M. Himley (Eds.), *Jenny's Story: Taking the Long View of the Child: Prospect's Philosophy in Action* (pp. 154-166). New York, NY: Teachers College Press, 2010.
- Carini, P. F. 2010c. "The Power of the Particular". In P. F. Carini & M. Himley (Eds.), *Jenny's Story: Taking the Long View of the Child: Prospect's Philosophy in Action* (pp. 58-63). New York, NY: Teachers College Press, 2010.
- Carini, P. F., & Himley, M. (Eds.). *Jenny's Story: Taking the Long View of the Child: Prospect's Philosophy in Action*. New York, NY: Teachers College Press, 2010.
- Carini, P. F., & Himley, M. 2010. "Preface". In P. F. Carini & M. Himley (Eds.), *Jenny's Story: Taking the Long View of the Child: Prospect's Philosophy in Action* (pp. xi-xiii). New York, NY: Teachers College Press, 2010.
- Church, R. L., & Sedlak, M. W. *Education in the United States: An Interpretive History*. New York, NY: The Free Press, 1976.
- Cremin, L. A. *The Transformation of the School: Progressivism in American Education, 1876-1957*. New York, NY: Vintage Books, 1961.
- "Descriptions of Prospect School". ca. 1965-1983. Prospect School and Center for Research and Education Archives (Carton 4, Folder 1A).
- "Editorial". 1931. *The Journal of Educational Sociology: A Magazine of Theory and Practice*, 5 (2): 65-66.
- Engel, B. S. 2005. "Introduction". In B. S. Engel (with A. C. Martin) (Eds.), *Holding Values: What We Mean by Progressive Education: Essays by Members of the North Dakota Study Group* (pp. 1-27). Portsmouth, NH: Heinemann, 2005.
- Featherstone, J. *Schools Where Children Learn*. New York, NY: Liveright, 1971.
- Featherstone, J. 2001. "Forward". In P. F. Carini, *Starting Strong: A Different Look at Children, Schools, and Standards* (pp. xi-xiii). New York, NY: Teachers College Press, 2001.
- Graubard, A. 1972. "The Free School Movement". *Harvard Educational Review*, 42: 351-373.
- Himley, M. (with Carini, P. F.) (Eds.). *From Another Angle: Children's Strengths and School Standards: The Prospect Center's Descriptive Review of the Child*. New York, NY: Teachers College Press, 2000. (小田勝己・小田玲子・白鳥信義(訳)『描写レビューで教師の力量を形成する一子どもを遠くまで観るために』ミネルヴァ書房, 2002.)
- 稲垣忠彦『アメリカ教育通信—大きな国の小さな町から—』評論社, 1977.
- Link, A. S. *Woodrow Wilson and the Progressive Era, 1910-1917*. New York, NY: Harper, 1954.
- Miller, R. *Free Schools, Free People: Education and Democracy after the 1960s*. Albany, NY: State University of New York Press, 2002.
- 小田勝己「訳者まえがき」。小田勝己・小田玲子・白鳥信義(訳)『描写レビューで教師の力量を形成する一子どもを遠くまで観るために』(pp. i-ix)。ミネルヴァ書房, 2002.
- 小野由美子. 1977. 「オープン・エデュケーションに関する一考察」『教育方法学研究』第2巻, pp. 17-26.
- Prospect School. 1986, March. *Prospect School Alumni Newsletter*. Prospect School and Center for Research and Education Archives (Carton 18, Folder 51).
- Prospect School and Center for Research and Education Archives, Department of Special Collections, Bailey/Howe Library, University of Vermont, Burlington, VT.
- Ravitch, D. *The Troubled Crusade: American Education, 1945-1980*. New York, NY: Basic Books, 1983.
- "Reorganization of Prospect". 1978-1979. Prospect School and Center for Research and Education Archives (Carton 7, Folder 1).
- Roosevelt, D. 2007. "Keeping Real Children at the Center of Teacher Education: Child Study and the Local Construction of Knowledge in Teaching". In D. Carroll, H. Featherstone, J. Featherstone, S. Feiman-Nemser, & D. Roosevelt (Eds.), *Transforming Teacher Education: Reflections from the Field* (pp. 113-137). Cambridge, MA: Harvard Education Press, 2007.
- 佐藤学『米国カリキュラム改造史研究—単元学習の創造—』東京大学出版会, 1990.
- Silberman, C. E. *Crisis in the Classroom: The Remaking of American Education*. New York, NY: Random House, 1970.
- Smith, L. A. H. "Open Education" Revisited: *Americans Discover English Informal Education, 1967-1974*. Storrs, CT: I.N. Thut World Education Center, 1988.
- Smith, L. A. H. 1997. "'Open Education' Revisited: Promise and Problems in American Educational Reform (1967-1976)". *Teachers College Record*, 99: 371-415.
- Strieb, L. Y. *Inviting Families into the Classroom: Learning from a Life in Teaching*. New York, NY: Teachers College Press, 2010.
- Vermont State Department of Education. *The Vermont Design for Education*. Burlington, VT: Queen City Printers, 1968/1971.

(指導教員 浅井幸子准教授)